

巻 頭 言

この頃、国立能楽堂がその主催公演のとき観客席の光量を落とすことが気になっている。そんな必要はあるまい、観客を安らかに眠らせようという陰謀かなどと悪口を言っているのだが、額縁舞台で演じられる新劇や商業演劇の類では気になることはないのである。

能舞台が現在のように屋根ごとそっくり建物の中に入ってしまったのは、それほど古い話ではない。岩波講座能・狂言Ⅰ『能楽の歴史』によれば、明治十四年、東京芝に作られた芝能楽堂がその嚆矢らしい。舞台と呼ばれるようなものは、本来屋外にあったのである。現在でも丹波篠山の能舞台や九段の能舞台、越谷市花田の越谷能楽堂のように、屋外に位置している舞台はあるが、それは珍しい存在で、一般的には冷暖房完備、人工光線の中で演じられるようになってきているのである。だから照明の光量を操作しようとするれば簡単なことなのだが、それでいいかという問題があるのである。

先代野村万蔵師（6世）がおっしゃっていたことで、記憶に残っているのだが、狂言はお客の顔を見ないじゃできない、というのがあった。また、今日はお客がよかったから気持ちよく酔えましたという言葉もある。観客の反応を大切にしていた万蔵師らしい言葉なのだが、狂言という演劇の本質に触れるものと言えよう。観客が受け身に役者の演技に引き込まれる、というのではなく、観客自らが参加することによって一曲の首尾が成立する、そういう感覚が万蔵師の舞台にはあった。客席の照明を落とすことは、そういう観客側の働きかけを遮断することではないか、これを万蔵師が生きていられたら認めただろうか、そんなことは無いだろうというのが、私の感想なのである。

2000年2月

言語文化研究所
所長 田口和夫